

明治三陸津波の記録 4 ～風俗画報より～

1896（明治29）年6月15日午後7時32分に起こった明治三陸地震は三陸沿岸に大きな被害を与えた。

当時この津波を報じたのが1896（明治29）年7月25日発行の『風俗画報』である。「大海嘯被害録」と題し絵図でその被害のすさまじさを人々に伝えている。

リアス・アーク美術館の収蔵コレクションから現在の南三陸町に関する絵図を抜粋し紹介する。

※海嘯とは、河口に入る潮波の前面が垂直の高い壁状になり、碎けながら川上に進む現象。
昭和初期までは、地震による津波も海嘯と呼ばれていた。



▲「志津川の人民汽笛を聞て騒擾するの図（志津川町）」

1896（明治29）年7月21日の出来事。港に停泊中の汽船が汽笛を鳴らした。その蒸気の吐き出される音が同年6月15日の津波の音にそっくりだったため、音を聞いた者が津波の襲来と勘違いし大声で騒ぎ大騒動になった。

臨時増刊風俗画報第百二十号掲載（リアス・アーク美術館収蔵）